

P15

小児の嚙下障害および構音障害に対する舌接触補助床の使用実績

○三浦 梢、井上梨紗子、石田一輝、鈴木淳司

医)広島もみじ会すずき歯科小児歯科

【目的】当院では総合病院の摂食・言語専門外来からの紹介により、咀嚼嚙下障害や構音障害に対するハビリテーションの補助装置として舌接触補助床(以下 PAP)を用いている。このたび対象患児の実態と PAP およびそれに準ずる装置の使用実績について調査を行った。

【方法】平成 22 年 4 月から平成 26 年 6 月までに摂食・言語専門外来からの紹介により来院した患児に対し年齢、性別、全身状態、口腔内状況(主訴)、装着した装置の種類について調査を行なった。

【結果】受診した総患児は 215 人、うち男児が 140 人、女児が 75 人であった。年齢は 0~23 歳と幅広いが、2~6 歳の低年齢児が 81.5%大部分を占めていた。全身状態は健常児が 127 人、精神発達遅滞 16 人、遺伝子疾患 16 人、広汎性発達障害 15 人、低出生体重児 12 人、聴覚障害 8 人、発達協調運動障害 7 人、その他であった(重複あり)。当院へ紹介された 197 人は咀嚼嚙下障害か構音障害もしくはその両方を主訴としており、その他は舌位の異常、高口蓋、顎関節症、歯列不正、鼻咽腔閉鎖不全、舌突出癖などであった。装着した装置は PAP220 人、その他の床装置 13 人、OK アプライアンス 11 人、咬合拳上スプリント 10 人、その他の装置 9 人であった(重複あり)。

【考察】保険改正などに伴い高齢者において PAP が注目されているが、小児においても咀嚼嚙下障害のハビリテーション装置としての需要は少なくないと思われる、今後期待される分野だと考えられる。

P16

小児における口唇閉鎖力に関連する臨床研究

○本城 孝浩 森川 和政 塩野 康裕

秀島 治 牧 憲司

(九歯大・歯・小児歯)

【目的】近年子どもの口唇閉鎖に関する様々な報告がされているが、開咬児に着目されたものは少ない。本研究では開咬児の小児期の口唇閉鎖力の特性を検討することである。

【方法】九州歯科大学付属病院小児歯科外来を受診した患児を対象とした。測定者の指示に従って装置による測定が可能な 6 歳から 10 歳までの小児のうち、正常咬合児 15 名ならびに開咬児 15 名を対象とした。口唇閉鎖力の測定には多方位口唇閉鎖測定装置(プロシード, 長野)を使用した。被験児に楽な姿勢で座位をとらせ、フランクフルト平面と床を水平にした状態で測定プローブを咥えて測定を行った。測定は 30 秒間行い、4 秒間ずつ計 3 回被験児に口すぼめ運動をさせて波形を抽出した。記録された波形のうち、最も安定している 1 波形を抽出し、出力開始後 1 秒から 2 秒までの力積(N・S)を計算し、この値を各被験児の口唇閉鎖力とした。計測された 8 方向それぞれの力積について解析を行い、顕著に口唇閉鎖力を得られた垂直方向の力について着目し検討を行った。

【結果】正常咬合児、開咬児について口唇閉鎖力を上方向/総合力、下方向/総合力で検討した。正常咬合児、開咬児の両群とも下方向からの口唇閉鎖力が上方向からの口唇閉鎖力より有意に大きい結果が得られた。

【考察】上方向、下方向からの口唇閉鎖力はそれぞれ、上唇と下唇からの口すぼめ運動による力を抽出していると考察された。過去の文献では正常咬合児について下口唇の筋圧が上口唇の筋圧に比べ有意に大きいと報告されている。今回の研究では開咬児の口すぼめ運動についても同様の結果が得られた。開咬児の口唇閉鎖時の周囲の軟組織の運動も、正常咬合児と類似している事が示唆された。